家読（うちどく）のすすめ

～家族で読みニケーションはじめませんか？～

＜家読とは…＞

家族のみんなで、読書活動に取り組むことを「家読（うちどく）といいます。家族のみんなで図書館や書店を利用したり、好きな本について話し合ったりしましょう。「テレビ」を消して、「ゲーム」「ＳＮＳ」の世界とも少しだけ離れ、「家読（うちどく）」に取り組んでみませんか？

＜子どもの発達段階に応じた読書を…＞

　日本人の読書離れは今や危機的状況ともいわれています。２月に全国大学生教連が実施した生活実態調査の結果によると、１日の読書時間「０」と答えた学生が４８％と半数近くにのぼりました。どこかの段階で心に響く１冊に出会えれば、この数も変わってきたかもしれません。
「読まなくても生活に不自由しない」「ネット、テレビ、ゲームなど他におもしろいものがある」子どもたちからそんな声も聞こえてきそうですね。ですが中学生はとても多感な時。ものの見方・感じ方・考え方を広げたり深めたりするためには、読書が最適なのです。またこの時期に多くの語彙や、豊かな感性、想像力・思考力を読書の力で伸ばすことが大切です。子どもの自主性な読書活動を薦めるためには、家庭の理解や協力が必要なのです。

＜でも「家読」の一番のねらいはこれ！＞

大人も子どもも忙しい毎日です。「読書なんて無理、時間ないし」そんな声もきこえてきそうです。ですがお休みの日にでかけることもあるでしょう。そんな時に一緒に図書館や書店めぐりはいかがですか？子ども自身が選ぶ本から、興味や趣味など子どもの世界がうかがえます。映画やドラマになった本を紹介し合うのも楽しいでしょう。また保護者が子どもの頃に読んだ本を我が子に紹介することもいいですね。多忙な中にもきっとある「すきま時間」をみつけて、読書を介した家族のコミュニケーションを図ってほしいと願っています。
身延中の生徒の様子から、「本をよく読む生徒」と「ほとんど読まない生徒」の２曲化が進んでいるように思えます。ですが、先生や友だちの紹介で本を読むようになったという生徒も確実に増えています。１番身近な大人である保護者からすすめられた１冊、一緒に読んだ１冊は生涯にわたる心の宝物になるかもしれません。

３年生の間で人気の１冊「カラフル」**森絵都・著（講談社）**
友だちから次の友だちへと本のリレーが繋がっています。
今回、ポップに描いた生徒も２名いました。

図書委員考案「読書が苦手でも読めるかもしれない」コーナー。ひとりでも多くの生徒が手にとってくれることを願って…。